

藤女子大学人間生活学部紀要, 第 53 号: 73-80. 平成 28 年.

The Bulletin of The Faculty of Human Life Sciences, Fuji Women's University, No. 53: 73-80. 2016.

特別支援学校における教育実習改善の基礎的研究 (3)

— 教育実習担当指導教員へのアンケート調査から —

今 野 邦 彦¹ 池 田 浩 明² 小 川 透³

Fundamental Study on Improvements in Teaching Practice at School for Special Needs (3)

— From Questionnaire Survey for Supervisor in Charge of Teaching Practice —

Kunihiko KONNO¹, Hiroaki IKEDA², Toru OGAWA³

Abstract

In FY 2001, the Department of Early Childhood Care and Education in the Faculty of Human Life Science at Fuji Women's University started offering a course for students to obtain a special school teacher's license (type I) in addition to a kindergarten teacher's license (type I) as a basic teaching certificate. In response to this, the department has surveyed teachers in charge of teaching practice at special schools that have received student teachers in order to comprehend the attitude of the schools and teachers. In this study, such surveys have been conducted and data have been accumulated to examine the attitude of teachers in charge of teaching practice. As a result, it has been found that over 90% of the instructors in charge of teaching practice answered that "They feel a sense of fulfillment." The study confirms that teaching practice is recognized positively by the schools and teachers. On the other hand, some problems related to teaching practice have been identified, such as a problem with the requirements for a teaching certificate.

1 はじめに

特別支援学校教諭免許状を取得するためには、特別支援学校での教育実習が必修である。この特別支援学校での教育実習について、渡邉ら(2008)は「これまで、教育実習に関する先行研究は、教育実習事前・事後の学生の変容からその意義や問題点を明らかにしながら、そのあり方や大学のカリキュラムの検討を行うといった研究、いわゆる大学の視点からの研究が中心に行われてきた」と

している。また坂本ら(2009)も「教育実習に関わる先行研究としては、教育実習の実施形態や評価に関わる客観的・外面的側面に着目した調査研究、教育実習に関しての現状報告や事前指導のありよう等についての報告、『附属学校園と協働した学部レベルでの学習指導案の指導』についての提言もなされている。また、教育実習における授業場面での教生の関わりについて検討した研究もある」としながら、「教生に対する具体的な指導内容や指導の進め方に関しての研究は、ほとんどな

所属:

¹ 藤女子大学人間生活学部保育学科

² 藤女子大学人間生活学部保育学科非常勤講師

³ 藤女子大学人間生活学部保育学科非常勤講師

^{1*2*3} Department of Early Childhood Care and Education, Faculty of Human Life Sciences, Fuji Women's University

れていないのが現状であろう」と述べている。特別支援学校での実習担当教員を対象にした研究は散見されるが、これらは教員養成系大学の附属学校を対象にしたものであり、附属学校以外の特別支援学校を対象に調査したものは見当たらない。

このような中、本学科の池田・小川・武石(2012、2013)は、広く特別支援学校の教育実習担当教員を対象に調査を行い、実習担当教員は教育実習に実践的な指導力を実質化することを求めていること、大学における事前指導や教育実習関連科目の指導内容としては、子どもの指導に関する具体的・実内容的な内容が求められていることを明らかにした。

2 目的

以上を踏まえ、本研究では池田ら(2012、2013)の調査を継続して行うことにより、様々な特別支援学校の実習担当教員が行っている指導内容や大学での事前指導に対する期待、考えについて検討し、教育実習の充実とカリキュラム改善に資するとともに、保育学科という本学科の特性に関わる課題について考察することを目的とする。

3 方法

2011年度から2014年度までの4年間に本学科の学生が教育実習を行った特別支援学校の実習指導担当教員に対し、アンケート調査を実施した。

アンケートでは、まず実習を終えての充実度に

ついて4段階での回答を求めた。次にその理由を6項目から、実習生への指導内容を10項目から、さらに実習前に大学で身につけてほしい内容を10項目から、いずれも3項目を選択する形で質問した。それぞれの質問には、「その他」として自由記述欄も設けた。

最後に、教育実習全体を通しての考え・感想について、自由記述のみで回答を求めた。

多選択法による結果は、集計して、その割合を求めた。自由記述回答の結果はKJ法により分類して整理した。

調査の結果、実習担当教員216名中177名から回答を得た。回答率は81.9%であった。

4 結果と考察

(1) 実習指導の充実感

実習指導担当教員が、実習生を指導したことによりどの程度の充実感を得たかを示したのが図1である。「かなり充実感を得た」と「少し充実感を得た」を合わせると、94.9%であり、実習指導担当教員の大多数が充実感を得ていた。

これは、池田ら(2013)の研究においてもほぼ同様の結果であり、実習指導担当教員は、実習生を担当することにより、自身の指導を振り返る機会を持ち、教育実習自体についても考える場となることから、ほとんどの場合において充実感を得ることができたと考えられる。

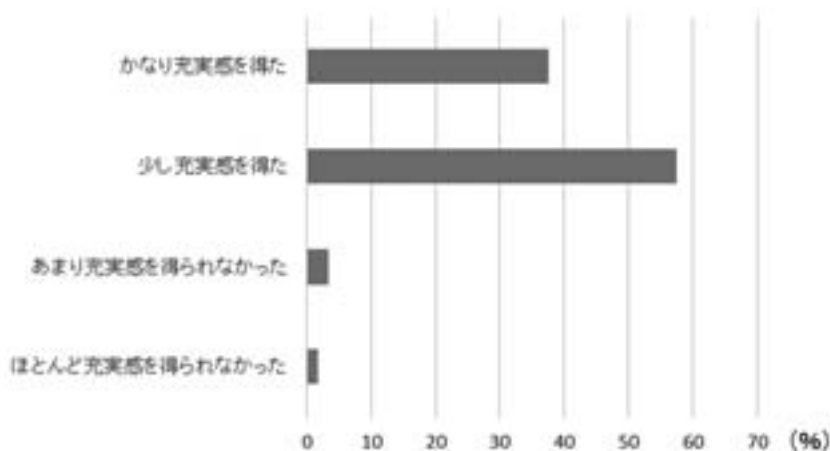


図1 実習指導の充実度

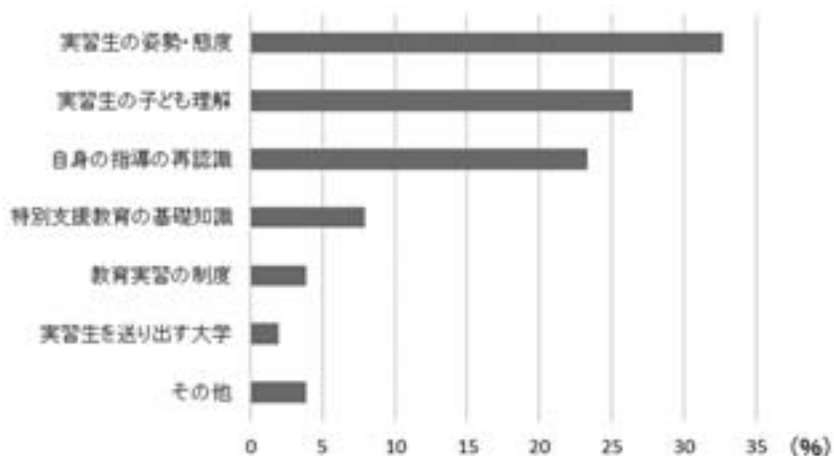


図2 充実感の内容

(2) 充実感の内容

前問に関わって、充実感を得た理由・内容を示したのが図2である。

「実習生の姿勢・態度」「実習生の子ども理解」「自身の指導の再認識」の順で回答数が多かった。またこの3項目の回答数が全体の82.4%という高率であった。「実習生の姿勢・態度」は、指導に対する実習生の取り組み方が評価された結果と考えられる。自由記述には「失敗も糧に努力し、学び取っていかこうとする姿勢」を評価する回答がみられた。「実習生の子ども理解」は、指導により実習生の子ども理解が進んだことで指導教員の充実感が得られたと思われる。これについては「実習生がいろいろな教師の指導を受け、自分で発展させて授業や子どもとの接し方に変化が見られた」

という記述があった。また自由記述の中に「実習生の教材研究の真面目な姿勢を見て、自身の指導等をあらためて考える機会になった」という回答があったが、このことから「自身の指導の再認識」について、実習生の指導を通して実習指導担当教員が自身の指導内容・方法を振り返ることにより、充実感を得た教員が多数みられたと考えられる。

(3) 実習生に対する指導内容

「実習生には主にどのような指導を行いましたか」という質問に対する回答が図3である。

「子どもとの関わり方」「子どもの理解の方法」「指導案の書き方」の3項目が多く、「教材教具の作成」「障害の特性」がこれに続いていた。「子ども

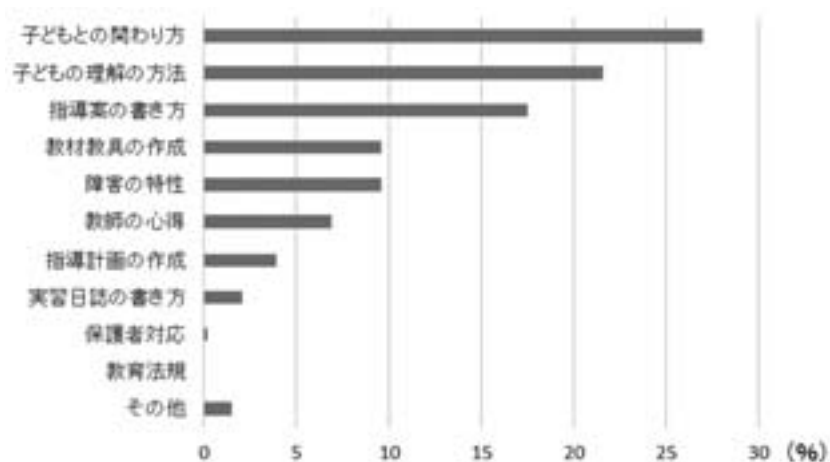


図3 実習生に対する指導内容

もとの関わり方」「子ども理解の方法」については、まさに教育実習の中心的な課題であり、実習生も障害のある子どもの学校を対象にした実習が初めてという例が多いため、指導機会が多くなったと考えられる。自由記述にも「最初に子どもの実態について伝えた」との回答が見られ、子どもの実態把握が指導の最優先事項であることが伺われた。「指導案」の書き方については、本学科の学生が経験した幼稚園の指導案とは様式や内容が異なるため、指導を要する場面が多くなったと思われる。

一方、「保護者対応」「教育法規」については、指導内容としてほとんど挙げられておらず、少なくとも本学の学生が行う教育実習の内容としては一般的ではないことが示唆された。

(4) 実習前に大学で身につけてほしい内容

「教育実習前に大学で身につけてほしい項目」という質問に対する回答が図4である。「障害の特性」「指導案の書き方」「教師の心得」が特に多く、次いで「実習日誌の書き方」「子どもの理解の方法」「子どもとの関わり方」の順で回答が多かった。

「障害の特性」「子どもの理解の方法」「子どもとの関わり方」については、前問の指導内容と同様に、子どもの実態把握に直結するものであり、講義・演習を含めた大学での事前指導においても最重要事項であることが明らかになった。「指導案の書き方」「実習日誌の書き方」は、保育学科の学生が特別支援学校の学習指導案の作成に慣れていないことにより事前指導を求める側面がある一方、実習日誌については幼稚園実習等である程度経験

を積んでいるにもかかわらず、大学での事前指導の充実を求められている。これは自由記述に見られる「語彙不足」「基礎学力がない」などの記述から、誤字・脱字などの基本的な点で課題のある学生がいたことによると思われる。「保護者対応」「教育法規」については、前問の「指導内容」と同様に回答数は非常に少なかった。なお、池田ら(2013)の調査以後の自由記述の中には、「著作権や個人情報の取り扱い」について大学での事前指導の充実を求める声が複数あり、時代の変化とともに大学での事前指導の内容も変わらなければならないことを示唆している。

(5) 教育実習の指導を通して指導教員が「考えたこと、感じたこと」

「教育実習の指導を通して、お考えになっていることや、お感じになっていることを記述ください」という質問に対しての回答は、4年間で183項目にのぼった。これをカテゴリー化して整理したのが図5である。

これはあくまでも記述の分野をカテゴライズしたもので、その中には肯定的感想・意見もあれば、否定的なものや要望なども含まれている。そのうえで、極めて記述が多かったのは「実習に対する意欲・態度」に関することであり、これに「自身の指導」「実習前に身につけてほしいこと」「日誌・指導案の書き方や文章力」「大学への要望」が続いた。また少ないながら「特別支援学校教諭免許」「実習前のボランティア」に関する記述もあった。前述の事項と内容的に重複する部分もあるが、代表的な回答を以下に記載する。

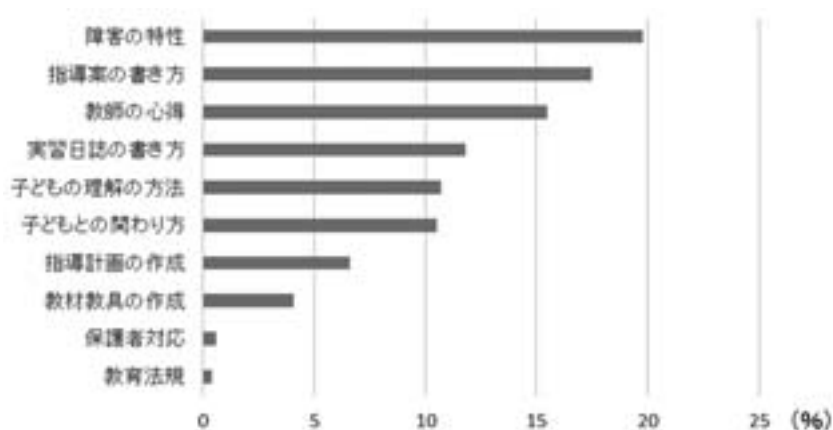


図4 実習前に大学で身につけてほしい項目

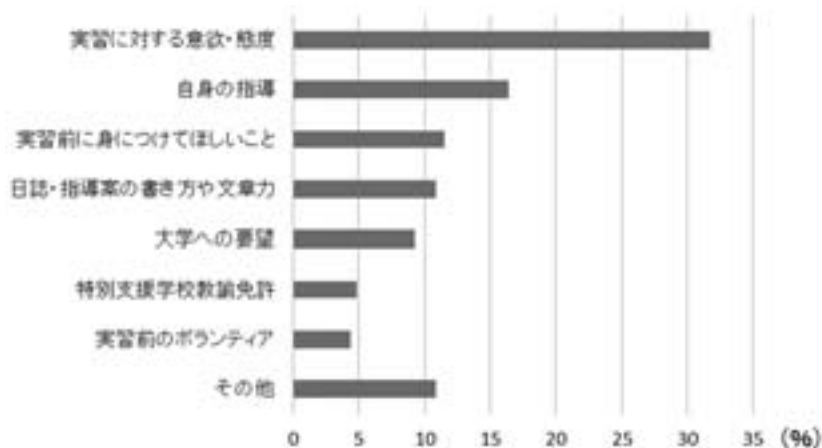


図5 指導教員の自由記述の内容

「実習に対する意欲・態度」では、「実習生はとても熱心で課題意識が高い」「実習に臨む態度・礼儀などがよい」という肯定的な感想がある一方で、「特別支援学校ではチームティーチングの場面が多いので、積極的に質問したり考えを伝えたりする姿勢を持ってほしい」「実習に対し受け身ではなく、自発的に取り組んでほしい」と、実習に臨む姿勢の改善を求める声もあった。

「自身の指導」では、「学生から刺激を受けた」「若い学生の感じ方や話が参考になった」「自分が実習生の時や新採用の頃のことを思い出した」「実習生の指導を通して自分自身が勉強になり自分の指導を再確認できた」と、実習生の指導が自身の指導の再認識につながったという記述が多数見られた。

「実習前に身につけてほしいこと」では「最低限、指導案の書き方、評価の仕方、授業づくりに関する基礎能力をつけてきてほしい」「保育学科なので、指導案の書き方や授業の展開などがゼロに近い状態からのスタートだった」など、学習指導案作成を中心とした授業づくり、評価に関する要望が多数見られた。

「日誌・指導案の書き方や文章力」では、「ワープロソフトの扱いにもっと慣れるとスムーズになる」「文章作成力は基本的な能力であり、在学中から分かりやすい文書作成に努めてほしい」といった具体的な指摘も見られた。

「大学への要望」では、具体的な事項のほか「大学での指導内容を学校現場、指導教員がもっと知ることによって指導がスムーズに進められる」と

いった総括的な意見も見られた。

「特別支援学校教諭免許」では、「(北海道の)教員採用試験の受検資格のない学生を受け入れる余裕は現場にはない」という声もあれば、「教職を目指すか目指さないにかかわらず、どこかで何かしらの形で、経験を活かしてほしい」「学生がとても熱心だったので、小学校の免許を取得できるよう検討してほしい」という前向きな感想、提案もあった。

「実習前のボランティア」では、「実習前にボランティアで子どもと関わっている学生の場合、生徒の対応が上手で、指導教員の話もよく理解できる」という指摘があった。

「その他」では、「デジタルの時代になって個人情報取り扱いについて気を遣う」「学生の持っているパソコンの方が学校の備品より新しく、互換性に苦慮する」といった時代を反映した感想も見られた。

5 全体考察

今回の研究結果を池田ら(2013)の研究と比較すると、各質問において回答数の多かった項目の順位はほぼ同じであった。このことから、2年間の調査をさらに2年間継続したことによって延べ回答数もほぼ倍増したが、教育実習指導教員の意識、指導内容、要望等には一定の傾向が見られることが示唆された。すなわち、実習担当教員は実習生に対する指導内容において、実践的な指導力を養成するための内容を重視していること、また

大学における事前指導においては、子どもの指導に関する具体的・実内容的な内容を習得しておくことが要望されていることが裏付けられた。

特に「実習生に対する指導内容」「実習前に大学で身につけてほしい項目」に着目し、教育実習の充実とカリキュラムの充実に向けて何が必要なのかを検討すると、児童生徒の実態を的確に把握する力の養成が必要であることが指摘されていることがわかる。それは事前指導と指導内容の両者において「障害の特性」「子どもの理解の方法」「子どもとの関わり方」といった項目が重要視されていることから明らかである。

事前指導において身につけさせたい項目として河村ら（2010）は、「児童生徒の実態を把握する観点を持ち、把握した内容を文章化できる」「自分の行う指導を評価する観点を意識して単元計画を作成でき、また評価の観点を具体的に記述できる」などをあげているが、これはまさに実態把握や評価を記述する能力の必要性を述べたものであり、事前指導の重要な要素ということができる。また井坂（2013）は、積み上げ型教育実習プログラムの有効性を述べているが、1・2年生時の特別支援学校の授業の観察・参加も事前指導として有効であると考えられる。

教育実習中の指導内容については様々な研究があるが、坂田（2007）は特別支援学校の教育実習において実習生の不安の解消にもっとも有効だった内容として、実習指導教員のアドバイスや教員の関わり方を見ることを挙げている。また、坂本（2009）は、実習生がミクロの視点で授業を見ることはできてもマクロの視点で見ることは難しいことを指摘し、だからこそ指導教員が目標との関連で総合的に授業を分析しアドバイスすることが重要であると述べている。

以上のことから、特別支援学校の教育実習においては、大学での事前指導において、児童生徒の実態把握をする力を養うことや特別支援学校の授業を観察・見学することを重視し、教育実習中においては、実習指導教員がマクロな視点から指導するという、指導の両輪が相補的に機能することにより、実習がより充実したものになるのではないかと考えられる。

また、幼児教育・保育専攻の学科特有の課題として河村ら（2012）は、学生に特別支援学校や小・中学校の特別支援学級等におけるボランティア活

動を奨励しているが、その理由として、多くの学生にとって特別支援学校等における経験が乏しいことに加え、幼稚園教員養成コース、保育士養成コースの学生の場合、介護等体験の機会もないことから、児童生徒についての具体的なイメージが持ちにくいことを挙げている。本学科でも同様の理由から、特別支援学校、特別支援学級でのボランティアに一定回数以上参加することを義務付けているが、この取り組みは今後も継続、発展させていく必要があると考えている。

6 おわりに

本研究では、特別支援学校の教育実習担当指導教員に対し、実習担当による充実度とその理由、指導内容、事前指導の課題などについて、アンケート調査を実施した。

4年間調査を継続したことにより、その内容の信頼性が高まり、結果を大学の事前指導・事後指導などのカリキュラム改善・充実に活かすことが期待できると考えられる。

これを受け、今後は調査内容を見直し、新たな課題に向けて調査・研究を進めていきたい。

本研究の実施にあたり、協力をいただいた特別支援学校及び教育実習担当指導教員の皆様に対し深謝したい。

文献

- 池田浩明・小川 透・武石詔吾（2012）「特別支援学校における教育実習改善の基礎的研究(1)——教育実習担当指導教員へのアンケート調査から——」藤女子大学紀要第Ⅱ部 49, 85-89.
- 池田浩明・小川 透・武石詔吾（2013）「特別支援学校における教育実習改善の基礎的研究(2)——実習校校長及び教育実習担当指導教員へのアンケート調査から——」藤女子大学人間生活学部紀要 50, 89-93.
- 井坂行男・森木亜季（2013）「特別支援教育教員養成における積み上げ型教育実習に関する基礎調査」大阪教育大学紀要第Ⅳ部門 61(2), 1-10.
- 河村 久・佐々木順二・東原文子・腰川一恵（2010）「特別支援学校教育の本質を踏まえた教育実習事前指導のあり方を探る」聖徳の教え育む技法 5, 1-18.
- 河村 久・東原文子・腰川一恵・高野聡子（2012）「特別支援学校教育の本質を踏まえた教育実習事前指導のあり方を探る(3)——カリキュラム全体を見通して——」聖徳の教え育む技法 7,

11-28.

坂本 学・丹羽克文・下地栄津子・齋藤志保子・河
辺正明・山田賢治・山本敬子（2009）「特別支援
学校小学部での教育実習における教育実習生に
対する指導内容——指導案指導と授業反省会を
通して——」三重大学教育学部附属教育実践総

合センター紀要 29, 47-53.

坂田花子・東平朋子・江田裕介（2007）「附属特別支
援学校における教育実習の在り方について探る
——教育実習生への調査を通して——」和歌山大
学教育学部教育実践総合センター紀要 17,
111-119.